九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[08_02]情報処理教育広報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/6768424

出版情報：情報処理教育広報. 8 (2), 1985-12. Educational Center For Information Processing, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

巻　頭　言

川端　久夫*

執筆の依頼を受け何を書こうかと迷ううちに、ふと気づいたのは、‘情報’の語義ないし意味する外延が、今日、べらぼうに巨大なものになっている、ということである。私が物心ついて最初に接した‘情報’は先任参謀（情報担当）といった類のもので、スパイの匂いがしていた。やがて「内閣情報局」など、思想弾圧機関の形容詞となり、敗戦直後に接したＣＩＥ（民間情報教育部－ＧＨＱの下部機関）の言動にも「原住民教育」の押しつけがましさが感じられた。要するに、人目をしのぶよからぬ企みから発した後暗さがつきまとっていたのである。

私は、当時の文系学生の常として、一時期哲学論議に熱中したのだが、その際の２大キイ・ワードは、‘物質’と‘観念’であった。論議の生成・発展を貫く法則は明快かつ普遍的　――つまり、観念優位の方向に一時高揚し、やがて物質側の勝利に帰する――　であり、‘観念論（的）’というレッテルは致命傷であって、論戦の唯一の秘訣は自分に張られる先に相手に張りつける、そのタイミングをつかむことであった。レッキとした理論家の世界でも、たとえば技術論論争というものがあった。技術の概念は「物的生産手段の体系」と規定され、「生産的実践における客観的法則（性）の意識的適用」に求める見解は、‘観念論’として却けられた。

観念－物質の二分法を‘情報’の概念に適用すれば、さしあたり、情報≒観念ということになろう。しかしこの‘観念’は基本的に物質に規制される存在ではなく、むしろ、物質を外部から誘導・成形するばかりでなく、内部に浸透し変質させ、その究極において、物質を‘資源’として処理＝支配するものなのである。かくて情報は、自然科学・社会科学を貫通する基礎範疇となり、人間のすべての営みは情報処理とそれに従属した資源処理の諸形態として把えられる。近々５０年ほどの間にかくも質量的な成長を遂げたコトバは他にあるまい。

情報を制する者は世界を制する。情報処理に熟達しえない者は、政治、経済、文化、すべての営為において脱落する。この真理を承認するかぎりの個人・集団・組織は、何よりもまず、現に効率的かつ大きな発展可能性をもった情報処理技術の体得に物心両面を集中しなければならない。４年前の巻頭言から孫引きすると、電算機利用の情報処理を“Ｔｈｅ　Ｓｅｃｏｎｄ　Ｌｉｔｅｒａｃｙ”とする認識は、一般情報処理教育に対する世界の共通認識となっている、という。

わが経済学部も、つとに上記の真理を認め、従来から大いに当センターの恩恵を受け、文系端局をあづかってそれなりの協力もしてきたつもりである。本年度入学生から「情報処理」を基本科目（選択必修）に指定して教育の徹底をはかることとし、懸案だった専任教官も近く配属される運びとなった。改めて、センター関係各位に対し、倍旧の御引き立てをお願いいたします。

＊経済学部長